



松浦市立鷹島中学校

■シリーズ■ 中学校武道

授業の充実に向けて

124

つまずきをどう克服したか①7
(なぎなた授業を実施せよ！)

松浦市内中学校の取組

長崎県松浦市立鷹島中学校・今福中学校

平成26年10月、松浦市で行われた「長崎がんばらば国体」のなぎなた競技会の表彰式で、当時の友広郁洋松浦市長は突如として「なぎなたのまち松浦」を宣言した。なぎなたの振興普及の歴史はまだまだ浅かった松浦市では、市の職員を中心に多くの関係者が驚いた。立て続けに平成27年度より中学校の武道授業でなぎなたを実施するとの指導が市内の中学校全てに飛んだ。

「本当か？」。中尾賢志松浦市立鷹島中学校保健体育科教諭は不安にかられた。自身はバレーボールが専門で、それまでなぎなたには全く触れたことがなかったのである。

取材班は昨年12月12日、松浦市立鷹島中学校と今福中学校に飛んで両校を中心とした松浦市内のなぎなた授業の取組に迫った。

1 「なぎなたのまち松浦」宣言

平成15年に全国高等学校総合体育大会のなぎなた競技が開催されたことをきっかけに、松浦市は平成26年開催の「長崎がんばらば国体」のなぎなた競技開催地として決定した。平成21年から、国体で活躍する選手育成のため、松浦ジュニアクラブ活動（なぎなた教室）や、平成23年より、生涯にわたってなぎなたに親しむ機会を提

供するため、市内の各小・中学校でなぎなた体験学習を実施していた。そして迎えた平成26年10月の長崎国体なぎなた競技では、地元の長崎県チームが少年演技競技の部・成年演技競技の部で優勝、成年試合競技の部で3位入賞して、総合成績2位と活躍。その表彰式において当時の友広郁洋松浦市長は突如として「なぎなたのまち松浦」を宣言した。その模様は地域の新聞などメディアにも取り上げられ、松浦市はより一層のなぎなた普及活動に力を入れていくこと

になった。

平成26年より、市外から松浦市立鷹島中学校に赴任してきた中尾賢志保健体育科教諭は国体にはボランティアスタッフとして参加。

市長の宣言により市役所職員・関係者が大慌てとなる中、「松浦市はなぎなたが盛んなんだな」と呟き、それを静観していた。

しかし、市ではなぎなたのまちの取組の一つとして、中学校武道授業において、なぎなたの導入を決定。市内7校全ての中学校で平成27年よりなぎなたを実施する旨

2 なぎなた授業に向けて（松浦市の取組）

が通達された。「本当か？」。それまでなぎなたには全く触れたことのないバレーボールが専門の中尾教諭は不安にかられた。

松浦市教育委員会は、平成27年から29年までスポーツ庁（当時は文部科学省）委託事業の武道指導充実・資質向上支援事業をなぎなた授業で実施することを決定した。そこで、全日本なぎなた選手権大会で過去5回優勝経験のある板垣勇氏を中心として、なぎなたのまち伊丹市に出向き、関係者より様々な意見を伺い、松浦市としてのなぎなた授業に向けて、指導案を作成していった。

年間数時間の授業では防具の着脱は困難であること。防具での授業の場合、学校側も管理の面で大きな負担になると板垣氏は考え、試合用のなぎなたのみを使用する演技競技を主とした10時間の指導

案を作成していった。1年生が基本的な「打突」から「打ち返し」まで。2年生が「しかけ応じ」の1、2、4本目、3年生が「リズムなぎなた」である。最後の学年でリズムなぎなたを盛り込んだのは、基本的なぎなたの操作方法ができるようになってからリズムなぎなたに取り組んだ方が、より形になるだろうとの意図がある。また、授業の最後には各学年とも、競技会を設けて、生徒の学習意欲の向上を図っている。

わずか半年で板垣氏は指導案を完成させ、さらには早々になぎなた授業のためのDVDを作成。なぎなたを専門としない教員のために視覚的にもより工夫がなされ、平成27年度のなぎなた授業に臨んだ。

そして、平成28年には市独自の指導書『武道授業（なぎなた）資料』を正式に作成。これはなぎなた授業の大きな実施根拠になっているという。

さらに、各地域からなぎなたの講師を招聘すること

が可能となった。

また、市では夏休みを利用して2日間のなぎなた講習会を実施。市内の保健体育科教員全員（約10人程度）が集まり、板垣氏によって指導案が教示されたという。

「初めの年の26年、27年までは先生方からのなぎなたに対する風当たりは強かったですね」。当時の様子を振り返り、板垣氏は苦笑する。

長崎県では大半の学校が柔道授業を実施している。当然松浦市でも27年度以前となると鷹島中学校をはじめとする各中学校では柔道を実施していた。長年にわたって柔道を行ってきた教員にとって、全く経験のない種目のなぎなた授業を実施することは、理解することから始めなければならず、多忙

武道授業（なぎなた）指導資料
〔平成29年度改訂版〕



松浦市教育委員会

『武道授業（なぎなた）指導資料』



左から川田そら氏、板垣勇氏、田口和充氏



中尾教諭（中央右）による全体指導



勢いよくなぎなたを振り下ろす

中尾教諭は「打ち返しができあがりつつあるので、さらに鋭くできるように練習していきましょう」と呼びかけ、授業は開始された。中尾教諭の指導により、生徒は大きく広がって中段の構えから「ビュー」と風切り音を鳴らしながら、勢いよくなぎなたを振り下ろして空間打突を行った。

八相の構えからの側面打ちなど一連の反復練習を終えた後、「今日の一回限りですが、なぎなたのスパーマンが授業に駆け付けてくれました。凜としてやりましょう」と中尾教諭。田口氏も「今日はみんなのためにスペシャリストを連れてきました」と続けて、ゲストティーチャー兩名が紹介された。川田氏は市教委に入り、2年目。3年前までは松浦高校なぎなた部で板垣氏の指導を受けていたという。やはりなぎなたで優秀な成績を収めている。

板垣氏は「みんなの空間打突を見てビックリしています。さらに綺麗に打ち返しができるようにやって行きましょう」と生徒を鼓舞し、ゲストティーチャーによる指

4 鷹島中学校、なぎなた授業の実際

板に付いてきた気がします。授業にも自信が持てるようになりました。

※松浦市のなぎなた授業については、本誌6月号「武道授業実践の概要」でお届けします。

それでは実際に鷹島中学校のなぎなた授業を見てみよう。

取材では1時間目に1年生の授業（14名）、2時間目に2年生と3年生合同（33名）の7回目の授業が行われた。

(1)ゲストティーチャー

この日はゲストティーチャーとして前述の板垣勇氏（長崎県立松浦高等学校教諭）と川田そら氏（松浦市教育委員会職員）の2名が加わっていた。

松浦市教育委員会ではなぎなた授業開始にあたり、ゲストティーチャーという仕組みを設けた。なぎなた専門の指導者が各学校に来校し、1日に限り授業を補佐するものである。教育委員会は授業が開始される前に学校から実施期日、時間数などの希望を調査し、スケジュール調整を行う。取材当

日は、田口和充氏（松浦市教育委員会学校教育課指導主事）が両氏の送迎、学校側との繋ぎ役として帯同していた。板垣氏は開始された27年から、川田氏は2年目のゲストティーチャーである。両氏は授業前に生徒の様子を窺い、指導の流れを相談していた。

生徒たちは非常に楽しそうな様子だったという。実際にアンケータをとると、女子では圧倒的に柔道よりなぎなたの方が好評であった。

生徒たちは非常に楽しそうな様子だったという。実際にアンケータをとると、女子では圧倒的に柔道よりなぎなたの方が好評であった。

を極める教員にとって大きな負担となる。件の話は当然のことである。

また松浦市は、長崎県北部の北松浦半島に位置しており、離島部も市域に含まれる。そのため市内の移動にも大きな負担がかかるため、人事交流を行いつらいという地域の特徴も新たな種目を開始するにあたって足枷となっていたのかもしれない。

前述の鷹島中学校は元寇に関わりの深い離島、鷹島に位置しており、市内中心部から向かうとなると、車で一度佐賀県に入り、鷹島大橋を渡って鷹島に入島する。高速道路を使っても約1時間の行程である。

その鷹島中学校の中尾教諭も27年の夏に前述の講習会を受講。やはり今までは武道授業として柔道を指導してきており、なぎなたは言葉を知っている程度であった。しかしながら、夏休み明けには直ぐになぎなた授業は開始される。「やるしかない」と覚悟を決めて熱心に受講していった。

実際の授業では、1年目である27年度は講習で示された指導計画をそのまま授業に取り入れた。その年、鷹島中学校では、全学年男女とも、なぎなたを10時間、柔道を8時間、中尾教諭一人で実施した。ちなみに武道授業に計18時間

も割けるのは、鷹島中ではプールがなく、水泳の授業が行われないので、カリキュラムに少し余裕があるためである。また、なぎなた実施にあたっては、市内の保健体育科教諭は全員顔見知りであるため、情報を共有し、その情報を授業に活かして授業の質を高めていった。

授業では、松浦市作成のDVDが非常に役に立ったそう。鷹島中では、なぎなたを稽古している生徒はおらず、対人競技であるなぎなたの見本を中尾教諭一人では示せない。そのため、指導研究用のDVDを授業中にスロー再生して生徒に視聴させたという。

中尾教諭は、授業を行ってみると柔道とは異なり、なぎなたは距離感があるので安全に指導できることに気づいたという。直接の対人接触がないため、男女共習で実施できるのも大きなメリットだそう。

生徒たちは非常に楽しそうな様子だったという。実際にアンケータをとると、女子では圧倒的に柔道よりなぎなたの方が好評であった。

生徒たちは非常に楽しそうな様子だったという。実際にアンケータをとると、女子では圧倒的に柔道よりなぎなたの方が好評であった。



鷹島大橋を渡って鷹島に

3 なぎなた授業に向けて（鷹島中学校の授業実践）

も割けるのは、鷹島中ではプールがなく、水泳の授業が行われないので、カリキュラムに少し余裕があるためである。また、なぎなた実施にあたっては、市内の保健体育科教諭は全員顔見知りであるため、情報を共有し、その情報を授業に活かして授業の質を高めていった。

授業では、松浦市作成のDVDが非常に役に立ったそう。鷹島中では、なぎなたを稽古している生徒はおらず、対人競技であるなぎなたの見本を中尾教諭一人では示せない。そのため、指導研究用のDVDを授業中にスロー再生して生徒に視聴させたという。

平成29年度は市の研究授業を鷹島中学校が受け持つこととなり、中尾教諭は日本武道館・全日本なぎなた連盟主催、日本武道館研修センター（千葉県勝浦市）で実施された全国なぎなた指導者研修会に参加。そこでは、なぎなた授業の指導法を事細かく教えてもらい、日本武道協議会発刊の『中学校武道必修化指導書』とそのDVDも受け取ることができた。「研修会直後に授業だったので非常に役に立ちました。参加して本当に良かったです」。29年度からは日本武道協議会の指導書も活用しているという。

たという。なぎなた特有の凜とした所作などが女子を惹きつけるのではなからうか。

「はじめの2年間は自身がまだまだ不慣れであったこともあり、授業で指導している時に、やっと自分でなぎなたの操作法が理解できる時がありました。常に自身の技術も高めながら同時並行で授業を行っていました」。中尾教諭は当初の授業の様子をそう振り返る。

取材当日の午後、ゲストティーチャー2名は田口氏帯同のもと、松浦市立今福中学校で授業を行った。今回はそのなぎなた授業も取材させてもらった。今福中学校は川田氏の母校でもある。今福中学校では、授業に加えて、体育祭で女子はリズムなぎなたを披露しているという。当日は袴を着て全生徒一斉に演武。大変な盛り上がりを見せるという。

体育祭でのリズムなぎなたは、平成26年の国体で今福中の生徒がリズムなぎなたを披露したことがきっかけで、毎年行われるようになったという。体育授業の実施前なので1年生はリズムなぎなたが最初のなぎなた授業となる。

「なぎなた授業は、昨年までは1年生のみの男女共習で10時間程度実施していましたが、今年は2・3年生でも4・5時間程度、3学期に実施する予定です」と担当の

5 今福中学校での 授業実践



打ち返しの競技会



優勝はなぎなた経験者を含んだ女子チーム



サインを求める生徒

黒崎徳嗣教諭は今福中学校のなぎなた授業を説明する。今福中でも水泳の授業は実施されないため、カリキュラムに少し余裕がある。授業は平成27年から黒崎教諭一人で行っているが、なぎなた経験者の生徒が在籍しているので、授業の手助けとなっているという。

加えて今福中学校では本年より、武道授業はなぎなたのみを実施することだ。「加えて授業」ではなく「替えて授業」としてなぎなたが実施されていることに感銘を受ける。松浦市の指導書作成をはじめとする様々な尽力。黒崎

教諭たち学校関係者の大きな成果であろう。

授業は、1年生男女14名による8時間目と9時間目が2回続けて行われていた。当日の初めの授業では打ち返しのグループ学習を復習として行い、次の授業では打ち返しの競技会が開催された。

競技会では、ペアで男女7チームに分かれ、2チームずつ旗判定により勝敗を決する。予選リーグを行い、準決勝から決勝はトーナメントによって競われた。

勝敗に関わるためか、生徒は一層意欲的に取り組んでいる。競技

会は大変な盛り上がりを見せ、優勝はなぎなた経験者を含んだ女子チームとなった。

また、授業では特別支援学級の生徒2名も参加した。その内の一人の演技を板垣氏が絶賛。授業後に当生徒が「板垣先生に認めてもらえたから嬉しいです」と皆に授業の感想を述べて、笑顔をみせていた。知的障がいのある生徒とともに実施できるのが松浦市のなぎなた授業であるようだ。

授業終了後には、板垣氏、川田氏は生徒からサインを求められ、大変な人気ぶりであった。

導は始まった。

川田氏は「なぎなたは身体に付けることが大切です」と強調。その後「中段に構える時は後ろ足を下げるのではなく、前足をまっすぐ前に出します」など、注意点を丁寧に説明していった。

大きく広がった空間打突による打ち返しの指導では全体の指揮を川田氏が行い、板垣氏が個々の演技を修正していった。

次にペアになり、向かい合って打ち返しを行うと、空間打突とは異なり、途端に戸惑い、しどろもどろになる生徒たち。



川田氏は丁寧に操作法を説明する

板垣氏は「相手との打ち返しになると、空間打突とは異なり、面ではどうしても受ける側のなぎなたを狙ってしまいます。それがうまくいかない原因です。しっかりと面の高さを打っていきましよう」とその原因を解説。両氏で打ち返しの模範を示した。続けて板垣氏は「受ける側はどうしても面が怖いかもしれません。しかし、自分のなぎなたを体に付けてください。なぎなたを体から離して面を前で迎えないでください」と受ける側の所作を説明した。

再びペアになり、打ち返しの反



両氏によって打ち返しを模範

復練習。板垣氏が全体指導を行い、細かな点を教示していく。間違えるように生徒たちは上達していく。

「だいぶ綺麗になりましたね。なぎなたは腕力ではなく、身体に付けて受けます。これが女性の武道と言われる所以です」とまとめ、授業は終了した。

(3)2年生・3年生の合同授業

1年生と同様に始めは中尾教諭が授業を行い、全体練習後に両氏に交代。

両氏によって仕かけ応じの見本



川田氏は、ユーモアたっぷりになぎなた本来の意味を説明(2年生・3年生の合同授業)

が示された後、川田氏は「演技に物語があるのがわかりますか」と生徒たちに投げかける。続けて「応じは自分の命が惜しいので、仕かけの攻撃から自分を守り、打ち返しに出て相手になぎなたを当てます。はい、これで仕かけは死にましたね」とユーモアたっぷりに、仕かけ応じの本来の意味を説明した。

その後は、生徒が苦手とする4本目を中心に、両氏によって細かく注意点が説明・指導されていた。



全日本なぎなたの形4本目を中心に指導

松浦市なぎなた授業 のメリットと課題

鷹島中の中尾教諭は、なぎなた授業に慣れてくると、ある疑問も浮かんできたという。

「なぎなたは痛くもなく、確かに安全で授業としてやりやすい。武道の入口としてとても入りやすいと思います。しかし、矛盾しています。武道の授業では痛みを感じなければいけないと思っています。それを通して相手を尊重する態度が養成されるのだと思います。そのあたりは今のなぎなた授業では難しいなと思いますね」

長年柔道を授業で指導してきた教員ならではの意見ではないだろうか。

「また、授業では、運動量の確保が難しいと感じています。対策として素振りをテンポよく行つて補つております」

鷹島中学校同様にゲストティーチャーによって進行する授業の様子を見守りながら、今福中学校の

黒崎教諭は「ゲストティーチャーの指導は、我々の荒削りな授業を仕上げてくれます」と胸をなでおろしていた。

「しかし、柔道を行わず、なぎなただけで良いのかな。とのジレンマもあります」

やはり鷹島中学校の中尾教諭と同じような意見であるようだ。差異はあれども市内の保健体育科教諭が共通して疑問に思う点かもしれない。

「長崎ではほぼ柔道を授業で行っています。いつかは松浦市外へ人事異動となるため、柔道を行っていないと不安が残るでしょう」と田口氏は教員の心情をそう分析する。

また、ペアになつての学習では、鷹島中学校の中尾教諭の説明のとおり、男女のペアもできており、授業者は男女別のグループ分けを気にすることなく指導できる、なぎなたの授業ならではのメリットも感じ取れた。

そして、ゲストティーチャーの授業は、なぎなた本来の意味、由縁なども示され、生徒たちの理解

▽田口和充氏（松浦市教育委員会
学校教育課指導主事）

鷹島中学校や今福中学校の生徒たちの中で活躍する選手が出場できればとの期待を寄せて、また両中学校のなぎなた授業、なぎなたのまち松浦の隆盛を願いたい。

▽板垣勇氏（長崎県立松浦高等学校教諭）

「鷹島中学校のなぎなた授業は、競技者としてみても高いレベルの武道をやっているな、というのを感じます。中尾先生のご指導によるものだと思いますが、バレーボールの先生がここまで武道というものをできていることに感動しながら、指導していました。中尾先生のなぎなた授業に対する向き合い方が素晴らしいのだと思います。我々が指導して生徒の動きが良くなったのは、元々なぎなたに関心を持っているからだだと思います。本物の武道を見たとき、感動できる生徒を育てているのだと思います」

▽川田そら氏（松浦市教育委員会）

「鷹島中学校の生徒の皆さんはすぐにお上手ですが、なぎなたをどう使ったら、一番楽に出来るかという部分を指導して、生徒がさらに上達したのでよかったです」

と技術力向上に大きな役割を果たしていることが見て取れた。

最後に、鷹島中では授業実施の7時間目、今福中では8時間目という生徒たちがある程度慣れてから専門家が指導するのは、初めから指導するよりも技術力向上の点では効率的であるのかもしれない。

まとめ

市長の宣言によって一斉に開始

された松浦市でのなぎなた授業。

「最大の課題は教員の人事異動によってその教員が構築していった指導法が途切れてしまうことです」と中尾教諭は指摘する。実は中尾教諭も来年度は市外への異動の可能性があり、異動すればなぎなたを指導することはないという。この件について学校が主体となつて解決することは難しいと中尾教諭は考える。

前述の市の研究授業に加えて、市外に異動した教員も含めた研究

授業などが必要なのではないだろうか。教員が悩むことなくなぎなた授業を行えるような枠組みを、県と市が連携して是非とも構築してもらいたい。

27年・28年度の講習会では教員からの風当たりが強いと指摘していた板垣氏であるが、最近では風向きが変わったと感じているようだ。防具を付けて講習会を行ったことで、教員たちはなぎなたの理解が深まり、女性の教員を中心に講習会を引張ってもらい、なぎなた授業についても理解を示しているという。

また、板垣氏は松浦高等学校でなぎなた授業を実施。中学校でのなぎなた授業を高校にも繋げたいと考えている。

4年の月日を経て、多くの関係者の努力によって、松浦市は中学校のなぎなた授業を含めて教員・関係者のなぎなたの理解が深まり、「なぎなたのまち」へと変容しつつある。

五輪イヤーとなる2020年のインターハイでは松浦市はなぎなた競技を開催する。今回取材した



MITSUBOSHI
SINCE 1953

日本製

峰

謹製 MINE -KINSEI-

最高級ミシン刺剣道具

武道用品の総合メーカー

株式会社ミツボシ

東京店：TEL (03) 6457-5601 大阪店：TEL (06) 6445-6285
福岡店：TEL (092) 589-5385 www.mitsuboshi-web.jp

お得な情報盛りだくさん！

ミツボシ公式
スマートフォンアプリ

ダウンロードはこちらから





ミツボシアプリ限定情報ゲット！